

# 日本語と広東語にある入声音を含む二字漢語の対照研究

## — 日本語母語話者の促音知覚を中心に —

(『言語の研究』5号)  
2019年7月

盧 文静

### 1. はじめに

古代日本語において、入声音<sup>(1)</sup>を含む漢字の字音は「六(ろく)」は「ろk」、「及(きふ)」は「きp」、「失(しつ)」は「しt」のように閉音節として発音された段階があるものと考えられる。古代の漢字音には喉内入声音-k、唇内入声音-p、舌内入声音-tの三種類がある。館野(2012a)・沼本(1986)では喉内入声音-k、唇内入声音-p、舌内入声音-tで発音することが日本語話者には困難であるため、狭母音[i][u]をつけて開音節化させ、喉内入声音キ・ク、唇内入声音フ、舌内入声音チ・ツに変化したことが指摘されている。それに対して、中国の広東語には現在でも入声-k・p・tの三種類がある。

【表1】は『学研漢和大字典』より前部の漢字が入声音である二字漢語を調査し抽出したものである。【表1】より、現代日本語の漢字の読み方は呉音・漢音・慣用音のいずれかが使用されており、入声音に後接する子音によって促音化する場合としない場合があることがわかる。館野(2012a)・沼本(1986)では入声音韻尾-kは無声子音kに限って促音化すると述べている。しかし、入声音韻尾-kに半濁音・無声子音pが後接して促音化する場合があるため、入声音韻尾-kの促音化には規則がない可能性があると考えられる。そして、入声音韻尾-pは先行研究の通り、古代語では「プ」または「フ」であったが、現代語では「ウ」や「ツ」に変化したために、現代日本語としては促音化する場合としない場合と両方が存在する。入声音韻尾-tは無声子音k, s, t, pのいずれかが後接しても促音化する。しかし、「質感(シツカン)」という例外もあった。

【表1 入声音の二字漢語】

	無声子音k	無声子音s	無声子音t	無声子音p(h)	漢字音
入声音韻尾-k	尺簡(セキカン)	尺寸(セキスン)	尺地(セキチ)	尺兵(セキヘイ)	漢音セキ
	北曲(ホッキョク)	北史(ホクシ)	北斗(ホクト)	北方(ホッポウ)	呉音・漢音 ホク
入声音韻尾-p	集古(シュウコ)	集散(シュウサン)	集中(シュウチュウ)	集配(シュウハイ)	漢音シュウ (シフ)
	立后(リッコウ)	立志(リッシ)	立地(リッチ)	立法(リッポウ)	慣用音リツ
入声音韻尾-t	切近(セッキン)	切正(セッセイ)	切直(セツチョク)	切迫(セツパク)	漢音セツ

一方、千島 (2005)・中嶋 (1994) によると、広東語ではk・p・tで閉鎖する音節（いわゆる「入声」の<sup>(2)</sup>こと）を「断音」といい、末尾子音のないものや、-m・-n・-ngの鼻音で終わる音節を「滑音」という。「断音」は「滑音」に比べて急激に終わるように発音されると指摘されている。「断音」は日本語の促音と同様に急に息を止めることを伴う。つまり、広東語では一文字の「出<sup>(3)</sup>chöt<sup>1</sup>」あるいは二文字の「壓迫<sup>3</sup>aat<sup>3</sup>bik<sup>1</sup>」は日本語の促音に類似した断音の現象が発生すると考えられる。

そこで、本研究では、日本で出版された漢和辞典を悉皆調査し、見出し語として日本語と広東語の両方にある入声音の漢字と、前部の漢字が入声音の二字漢語であるものを調査対象とし、日本語と広東語における入声音の漢字の使用状況を調査し分析する。また、広東語は日本語と異なり、入声にいずれの子音が後接しても断音の現象が発生するという仮説を立て、日本語母語話者を対象に、広東語における前部の漢字が入声である二字漢語の断音が日本語の音韻として促音のように聞こえるかどうかを調査し、分析することを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1. 日本語における入声音の変遷

【表2】は沼本 (1986) を参考に筆者が作成したものである。【表2】をみると、喉内入声音-kは平安初期に「ク」の仮名で表記され、平安中期に「キ・ク」に変化した。唇内入声音-pは平安初期から変わらず「フ」の仮名で表記されている。舌内入声音-tは平安初期に「チ」の仮名で表記され、平安中期から院政期まで揺れがみられる。喉内入声音キ・ク、唇内入声音フ、舌内入声音チ・ツは鎌倉時代までに全て定着したことが分かった。

【表2 日本語の入声音の変遷】

	喉内入声音-k	唇内入声音-p	舌内入声音-t
平安初期	ク	フ	チ
平安中期	キ・ク	フ	ム
平安後期～院政期	キ・ク	フ	<・フ・チ・ム→ツ
院政期～鎌倉時代	キ・ク	フ	チ・ツ

### 2.2. 広東語における入声の影響・音韻問題

久野 (2016) は、広東語JL<sup>(3)</sup>と北方方言JLを調査対象として、学習者における日本語の促音の脱落・挿入・混同について調査した。この調査によれば、広東語JLと北方方言JLの双方とも促音の誤りが観察されたが、広東語JLは促音を挿入しやすく、北方方言JLは促音が脱落しやすいという結果が得られたという。また、この誤りの差には母方言に入声の有無が影響していることが確認できたと述べている。張・劉他 (2015) は、日本語母語話者・広東語母語話者・北京語母語話者を調査対象として、母語方言に入声を持つ日本語学習者が促音を習得しやすいか否かについて調査した。結果として、促音の先行拍の長さ<sup>(3)</sup>と持続時間の長さの比率は広東語母語話者のほ

うが日本語母語話者に近く、質的な違いがなかったと指摘している。つまり、母語方言に入声を持つ広東語母語話者は母語方言に入声を持たない北京語母語話者より日本語の促音を習得しやすいのである。

馬（2009）では広東語音韻の表記方式は統一されていないと述べてある。広東語音韻の表記方式は「広州話拼音方案」、「香港政府粵語拼音」、「粵語羅馬化方案」、「教育学院拼音方案」、「香港言語学会粵拼方案」などがある。そのうち、「広州話拼音方案」のみ中国広東省の教育部門による制定がなされていないが、他は香港政府あるいは香港の研究団体や個人が制定したものであると述べている。また、馬（2009）では広東語の入声韻尾は語尾に現れ、絶対的な音長を持つものではないのに対して、日本語の促音は語中にしか現れない。入声韻尾を持つ広東語は日本語の促音のように、閉鎖時間によって意味を区別する機能を持つと書かれている。

### 3. 調査対象

広東語の漢字は繁体字で書かれ、簡体字と異なる字体が多く使用されている。日本で出版された広東語の辞典は極めて少ないため、出版年・収録項目・辞典内容を比較し、一番新しく出版された『東方広東語辞典』（2005）を用いた。『東方広東語辞典』は香港、マカオや広東省を中心とした日常的に使用されている広東語が記載され、約5000字・45000項目が収録されている。

また、広東語の漢字と比較するために、日本の漢和辞典では『学研漢和大字典』を用いた。『学研漢和大字典』には①常用漢字1945字、人名用漢字166字、②『現代新聞の漢字』にある漢字、③日本と中国の古典の読解に関する漢字、④漢字の意味を理解するのに必要な漢字、⑤使用頻度が高い国字、約11000字の親字が収録されている。そして、上古・中古・中世・現代の音韻変遷、呉音・漢音・唐宋音・慣用音の漢字音の区別、上声・平声・去声・入声の四声などが詳しく記載されている。異体字についても比較的常用されている字体が採録されている。

さらに、広東語の二字漢語と比較するため、現代語の漢語が収録されている『角川現代漢字語辞典』・『現代漢語例解辞典 二色刷 第2版』を用いた。『角川現代漢字語辞典』は新聞・雑誌、各種の用語集・辞典などの資料から、日常の言語生活に用いられる漢字約6000項目、漢字を含んで表記される漢字語約45000項目が収められている。それに対して、『現代漢語例解辞典 二色刷 第2版』は高等学校の漢文教材に用いられている熟語と、日常生活で用いられる漢字の熟語が記載されており、漢字表記の定着した和語・外来語の音訳語・固有名詞などを含んで約50000語が収録されている。

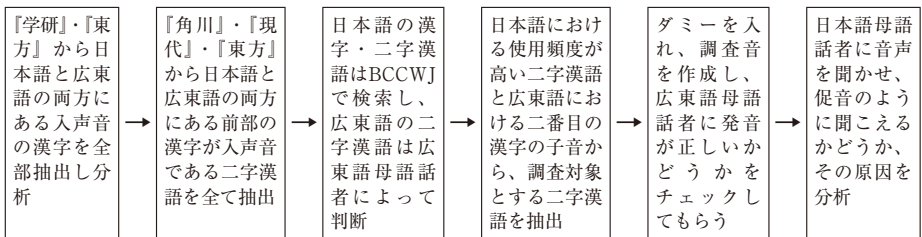
### 4. 調査方法

調査方法は以下のとおりである。【図1】のように、まず、見出し語として『学研漢和大字典』・『東方広東語辞典』に立項されている日本語と広東語にある入声音の漢字を全て抽出し、入声音-k・p・tによって分類する。「穀」のように広東語では入声、日本語では平声音の漢字や、“焗”

のように広東語にあり、日本語にないという漢字を除く。そして、日本語における入声音の漢字は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の検索エンジン「少納言」を用い、現代日本語として使用されているかどうかを確認する。このようにして、異体字を含め、日本語と広東語の両方にある入声音の漢字を抽出する。次に、抽出した日本語と広東語における入声音の漢字を入声音-k・p・tによって分類し比較する。

その後、前部の漢字が入声音である二字漢語の範囲にて、『角川現代漢字語辞典』・『現代漢語例解辞典 二色刷 第2版』に立項されている二字漢語と、『東方広東語辞典』に立項されている二字漢語を比較し、異体字を含めて両方の辞典にある二字漢語を全て抽出する。日本語における入声音の二字漢語は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の検索エンジン「少納言」を用いて、二字漢語の使用があるかどうかとその使用頻度を確認する。検索する際、基本的に二字漢語は名詞として、あるいはサ変動詞として使用されているものを調査対象とする。それに対して、広東語における入声の二字漢語は広東語母語話者によって判断する。その判断は、筆者は中国深圳出身の広東語母語話者1名と『東方広東語辞典』に立項されている二字漢語を全て検討した後で、二字漢語として広東人が日常生活で使用している広東語を抽出するという流れで行った。判断が困難である二字漢語はほかの広東語母語話者3名と検討し判断した。

日本語において使用頻度が高い<sup>(5)</sup>の二字漢語と広東語において二字漢語の二番目の漢字の子音から、調査対象とする二字漢語を抽出し、一つの子音に対して三つの二字漢語で聞き取り調査を作成する。調査項目は、入声音-kの二字漢語54語・入声音-pの二字漢語40語・入声音-tの二字漢語55語・ダミーの二字漢語55語・入声音に母音が後接する二字漢語7語である。これらの語を、広東語方言話者である筆者の発音で録音し、2名の広東語母語話者に録音した二字漢語の発音が正しいかどうかをチェックしてもらう。次に、日本国内の大学に在籍する母語話者の学生7名を対象に、二字漢語を見せないまま、静かな教室でパソコンの音声の例を聞かせてから、聞き取り調査を始める。調査の実施前にレジュメを確認し、調査の目的・選択肢の種類・回答時間などについて説明する。調査終了後、結果を分析し、広東語における前部の漢字が入声の二字漢語は日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえるかどうか、またその原因について分析する。



【図1 調査手順】

【学研】：『学研漢和大字典』 【東方】：『東方広東語辞典』  
 【角川】：『角川現代漢字語辞典』 【現代】：『現代漢語例解辞典 二色刷 第2版』

## 5. 日本語と広東語における入声音の漢字・二字漢語

『学研漢和大字典』・『東方広東語辞典』より日本語と広東語の両方にある入声音の漢字は入声音-kの漢字296字、入声音-pの漢字85字、入声音-tの漢字159字で、合計540字である。また、抽出した漢字を基準として、前部の漢字が入声音である二字漢語を『角川現代漢字語辞典』より抽出した結果、入声音-kの二字漢語403語、入声音-pの二字漢語103語、入声音-tの二字漢語308語であった。『現代漢語例解辞典 二色刷 第2版』では入声音-kの二字漢語396語、入声音-pの二字漢語98語、入声音-tの二字漢語295語であった。『東方広東語辞典』では入声-kの二字漢語448語、入声-pの二字漢語110語、入声-tの二字漢語336語であった。

## 6. 調査対象とする二字漢語

### 6.1. 入声音-k

日本語において使用頻度が高い二字漢語と、広東語において二字漢語の二番目の漢字の子音から、調査対象とする二字漢語は以下の通り54語抽出された。広東語において前部の漢字が入声-kの二字漢語には入声-kに後接する子音[kwh]の二字漢語は1語もなかった。

作品・特別・目標→[p]	楽譜・特派・玉佩→[ph]	国民・植物・革命→[m]
悪化・学科・克服→[f]	目的・特定・速度→[t]	国土・肉体・学童→[th]
学年・淑女・逐年→[n]	独立・学歴・迫力→[l]	国家・積極・削減→[k]
作曲・的確・特権→[kh]	覚悟・抑圧・白眼→[ŋ]	学校・楽器・適合→[h]
国際・直接・特徴→[ts]	約束・劇場・木材→[tsh]	学生・歴史・特殊→[s]
確認・責任・昨日→[j]	客観・陸軍・肋骨→[kw]	国会・復活・国王→[w]

【表3】で示しているように、入声-kに後接する子音[kwh]には二字漢語がない。それ以外の子音は三つずつの二字漢語で、合計54語を調査語とした。また、調査対象者は7名で、三種類の選択肢「○：促音として聞こえる」、「△：曖昧・聞き取れなかった・判断できない」、「×：促音として聞こえない」、合計378例という数があった。その中には、促音として聞こえる数は一番多く225例（59.5%）、曖昧・聞き取れなかった・判断できない数は一番少なく40例（10.6%）、促音として聞こえない数は聞こえる数の半分を占めて113例（29.9%）である。【表3】をみると、広東語は日本語と異なって、入声-kにいずれの子音が後接しても日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえる例が多いものと考えられる。【表3】より、広東語では入声-kに子音[p]・[ph]・[t]・[n]・[k]・[kh]・[ts]・[tsh]・[s]・[kw]・[w]が後接する場合、閉音節として促音のように聞こえるという傾向がみられた。それに対して、入声-kに子音[m]・[j]が後接する場合、閉音節として促音のように聞こえないという傾向があった。入声-kに子音[l]・[th]・[l]・[ŋ]・[h]が後接する場合、促音として聞こえる数と聞こえない数の差は3例以下であるため、閉音節として促音のよ

うに聞こえるか聞こえないかを判断しにくいと考えられる。

【表3 入声-kと入声-kに後接する子音】

子音	[p]	[ph]	[m]	[f]	[t]	[th]	[n]	[l]	[k]	[kh]	[ŋ]	[h]	[ts]	[tsh]	[s]	[j]	[kw]	[kwh]	[w]	合計378例 (100%)
語数	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	0語	3語	54語
○	18	13	3	8	21	10	14	9	16	18	8	9	19	11	17	3	15		13	225例 (59.5%)
△	1	1	2	2	0	3	4	4	4	0	3	5	1	4	0	4	1	/	1	40例 (10.6%)
×	2	7	16	11	0	8	3	8	1	3	10	7	1	6	4	14	5		7	113例 (29.9%)

\*○：促音として聞こえる      △：曖昧・聞き取れなかった・判断できない  
 ×：促音として聞こえない      /：二字漢語がない      子音：入声に後接する子音

## 6.2. 入声音-p

日本語において使用頻度が高い二字漢語と広東語において二字漢語の二番目の漢字の子音から、調査対象とする二字漢語は以下の通り40語抽出された。広東語において前部の漢字が入声-pの二字漢語には、入声-pに後接する子音[n]・[kh]・[ŋ]・[kwh]は1語もなく、[ph]は2語、[l]と[kw]とも1語のみであった。

答弁・甲板・合弁→[p]	合併・吸盤→[ph]	業務・接吻・閘門→[m]
十分・立法・雑貨→[f]	協定・湿度・接待→[t]	集団・合同・立体→[th]
急流→[l]	合計・合格・接近→[k]	執行・入学・集合→[h]
業者・集中・雑誌→[ts]	入場・合唱・甲虫→[tsh]	吸取・納税・入選→[s]
協議・入院・吸引→[j]	習慣→[kw]	協会・集会・挿画→[w]

【表4】で示しているように、入声-pに後接する子音[ph]は2語、[l]・[kw]は1語、[n]・[kh]・[ŋ]・[kwh]は1語もない。それ以外の子音は三つずつの二字漢語で、合計40語を調査語とした。また、調査対象者は7名で、三種類の選択肢「○：促音として聞こえる」、「△：曖昧・聞き取れなかった・判断できない」、「×：促音として聞こえない」、合計280例があった。その中には、促音として聞こえる数は一番多く172例（61.4%）、曖昧・聞き取れなかった・判断できない数は一番少なく31例（11.1%）、促音として聞こえない数は77例（27.5%）である。【表4】をみると、入声-pは入声-kと同様にいずれの子音が後接しても日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえる例が多いものと考えられる。【表4】より、広東語では入声-pに子音[f]・[t]・[th]・[k]・[h]・[ts]・[s]・[j]が後接する場合、閉音節として促音のように聞こえるという傾向がみられた。それに対して、入声-pに子音[p]・[w]が後接する場合は、閉音節として促音のように聞こえないという傾向があった。入声-pに子音[m]・[tsh]が後接する場合は、促音として聞こえる数と聞こえない数の差は2例以下であるため、閉音節として促音のように聞こえるか聞こえないかを判断しにくいと考えられる。また、入声-pに後接する子音[ph]・[l]・[kw]の二字漢語は【表4】のよう

に閉音節として促音のように聞こえるという傾向にあるが、二字漢語の例が少ないため判断できなかった。

【表4 入声-pと入声-pに後接する子音】

子音	[p]	[ph]	[m]	[f]	[t]	[th]	[n]	[l]	[k]	[kh]	[ŋ]	[h]	[ts]	[tsh]	[s]	[j]	[kw]	[kwh]	[w]	合計280例 (100%)
語数	3語	2語	3語	3語	3語	3語	0語	1語	3語	0語	0語	3語	3語	3語	3語	3語	1語	0語	3語	40語
○	7	9	9	13	20	13		7	16			12	14	7	14	19	7		5	172例 (61.4%)
△	1	2	4	2	1	3	/	0	2	/		5	1	5	0	1	0	/	4	31例 (11.1%)
×	13	3	8	6	0	5		0	3			4	6	9	7	1	0		12	77例 (27.5%)

\*○：促音として聞こえる      △：曖昧・聞き取れなかった・判断できない  
 ×：促音として聞こえない      /：二字漢語がない      子音：入声に後接する子音

### 6.3. 入声音-t

日本語において使用頻度が高い二字漢語と広東語において二字漢語の二番目の漢字の子音から、調査対象とする二字漢語は以下の通り55語抽出された。広東語において前部の漢字が入声-tの二字漢語には入声-tに後接する子音[n]と[kwh]とも二字漢語は2語しかなかった。

- |               |                |               |
|---------------|----------------|---------------|
| 日本・一般・発表→[p]  | 突破・切片・活潑→[ph]  | 質問・説明・絶望→[m]  |
| 結婚・出発・発揮→[f]  | 活動・決定・絶対→[t]   | 物体・撤退・切断→[th] |
| 一年・越南→[n]     | 設立・結論・失礼→[l]   | 結局・設計・日記→[k]  |
| 滑稽・列強・発給→[kh] | 血圧・発芽・一眼→[ŋ]   | 実行・哲学・出血→[h]  |
| 実際・設置・発展→[ts] | 一切・列車・出産→[tsh] | 実施・発生・一時→[s]  |
| 必要・一日・実現→[j]  | 結果・血管・日光→[kw]  | 殺菌・一群→[kwh]   |
| 撤回・説話・括弧→[w]  |                |               |

【表5】で示しているように、入声-tに後接する子音[n]・[kwh]は2語で、それ以外の子音は三つずつの二字漢語で、合計55語を調査語とした。また、調査対象者は7名で、三種類の選択肢「○：促音として聞こえる」、「△：曖昧・聞き取れなかった・判断できない」、「×：促音として聞こえない」、合計385例があった。その中には、促音として聞こえる数は圧倒的に多く268例(69.6%)、曖昧・聞き取れなかった・判断できない数は最も少なく44例(11.4%)、促音として聞こえない数は73例(19%)である。【表5】をみると、入声-tは入声-k・-pと同様にいずれの子音が後接しても日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえる例が多いものと考えられる。【表5】より、広東語では入声-tに子音[p]・[ph]・[f]・[t]・[th]・[k]・[kh]・[ŋ]・[h]・[ts]・[tsh]・[s]・[j]・[kw]・[w]が後接する場合、閉音節として促音のように聞こえるという傾向がみられた。それに対して、入声-tに子音[m]・[l]が後接する場合は、促音として聞こえる数と聞こえない数の差は2例以下であるため、閉音節として促音のように聞こえるか聞こえないかを判断しにくいと考えら



れる。また、入声-tに後接する子音[n]・[kwh]の二字漢語については、例が少ないため判断できなかった。

【表5 入声-tと入声-tに後接する子音】

子音	[p]	[ph]	[m]	[f]	[t]	[th]	[n]	[ŋ]	[k]	[kh]	[ŋ]	[h]	[ts]	[tsh]	[s]	[j]	[kw]	[kwh]	[w]	合計385例 (100%)
語数	3語	3語	3語	3語	3語	3語	2語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	3語	2語	3語	55語
○	14	12	9	11	20	18	6	8	20	9	12	18	12	19	14	21	18	7	20	268例 (69.6%)
△	1	5	2	5	1	3	1	4	0	7	2	3	3	2	0	0	3	2	0	44例 (11.4%)
×	6	4	10	5	0	0	7	9	1	5	7	0	6	0	7	0	0	5	1	73例 (19%)

\*○：促音として聞こえる      △：曖昧・聞き取れなかった・判断できない  
 ×：促音として聞こえない      子音：入声に後接する子音

#### 6.4. 入声-k・-p・-tと子音の有意差

【表6】・【表7】は入声-k・-p・-tと入声に後接する子音との実測値・期待値である。【表6】・【表7】より、 $P$ 値は0.0098、 $\chi^2$ は13.33である。 $P$ 値：0.0098 $<$  $\alpha$ より、統計学的有意差がある。促音として聞こえる数は多く665例（63.8%）、曖昧・聞き取れなかった・判断できない数は最少なく115例（11%）、促音として聞こえない数は263例（25.2%）という結果は偶然ではないことが確認できた。つまり、広東語では入声-k・-p・-tに、いずれの子音が後接しても日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえる傾向がみられる。

【表6 実測値】

	入声-k(54語)	入声-p(40語)	入声-t(55語)	合計
○	225	172	268	665 (63.8%)
△	40	31	44	115 (11%)
×	113	77	73	263 (25.2%)
合計	378	280	385	1043 (100%)

【表7 期待値】

	入声-k	入声-p	入声-t
○	241.01	178.52	245.47
△	41.68	30.87	42.45
×	95.32	70.6	97.08

\*○：促音として聞こえる      △：曖昧・聞き取れなかった・判断できない      ×：促音として聞こえない

#### 7. 同じ語数にみられる入声-k・-p・-tと子音

抽出された二字漢語が2語以下を除く36語を調査対象に、入声-k・-p・-tを比較した結果を【表8】に示す。



【表8 同じ語数の入声の比較】

入声に 後接する子音	[p]	[m]	[f]	[t]	[th]	[k]	[h]	[ts]	[tsh]	[s]	[j]	[w]	合計		
入声-k	○	18	3	8	21	10	16	9	19	11	17	3	13	148例 (58.7%)	252例 (100%)・ 36語
	△	1	2	2	0	3	4	5	1	4	0	4	1	27例 (10.7%)	
	×	2	16	11	0	8	1	7	1	6	4	14	7	77例 (30.6%)	
入声-p	○	7	9	13	20	13	16	12	14	7	14	19	5	149例 (59.1%)	252例 (100%)・ 36語
	△	1	4	2	1	3	2	5	1	5	0	1	4	29例 (11.5%)	
	×	13	8	6	0	5	3	4	6	9	7	1	12	74例 (29.4%)	
入声-t	○	14	9	11	20	18	20	18	12	19	14	21	20	196例 (77.8%)	252例 (100%)・ 36語
	△	1	2	5	1	3	0	3	3	2	0	0	0	20例 (7.9%)	
	×	6	10	5	0	0	1	0	6	0	7	0	1	36例 (14.3%)	

\*○：促音として聞こえる △：曖昧・聞き取れなかった・判断できない ×：促音として聞こえない

【表9】で示すように、入声-k・-p・-tでは促音として聞こえる数は493例（65.2%）、曖昧・聞き取れなかった・判断できない数は76例（10.1%）、促音として聞こえない数は187例（24.7%）であった。【表9・表10】より、 $P$ 値は0.0000145、 $\chi^2$ は27.68である。 $P$ 値：0.0000145< $\alpha$ より、統計学的に顕著な有意差が認められ、入声-k・-p・-tと子音の間には偶然ではない関係のあることが証明できる。つまり、広東語では入声-k・-p・-tにいずれの子音が後接しても、日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえる傾向があることが明らかになった。

【表9 実測値】

	入声-k (36語)	入声-p (36語)	入声-t (36語)	合計
○	148	149	196	493 (65.2%)
△	27	29	20	76 (10.1%)
×	77	74	36	187 (24.7%)
合計	252	252	252	756 (100%)

【表10 期待値】

	入声-k	入声-p	入声-t
○	164.33	164.33	164.33
△	25.33	25.33	25.33
×	62.33	62.33	62.33

\*○：促音として聞こえる △：曖昧・聞き取れなかった・判断できない ×：促音として聞こえない

## 8. 入声-k・-p・-tと母音

【表11】は入声-k・-p・-tと入声の前の母音とを比較分析した結果の表である。【表11】で示すように入声-k・-p・-tの二字漢語は合計149語・1043例である。このうち、促音として聞こえる数は圧倒的に多く665例（63.8%）、曖昧・聞き取れなかった・判断できない数は115例（11%）、促音として聞こえない数は263例（25.2%）である。【表11】をみると、広東語では入声の前の母音が[e]・[o]・[e]・[i]・[o]・[u]・[y]の場合では閉音節として促音のように聞こえるという傾向があると考えられる。それに対して、入声-k・-p・-tの前の母音が[a:]であれば、閉音節として促音のように聞こえないという傾向にあることが明らかである。また、入声の前の母音が[a:]の場合では促音として聞こえる数と聞こえない数の差は10例で、曖昧・聞き取れなかった・判断できない

数は促音として聞こえる数の半分を占めているために、閉音節として促音のように聞こえる場合と聞こえない場合の両方がある可能性があると考えられる。入声の前の母音が[œ:]・[ɛ:]の二字漢語は例が少ないため判断が難しい。

【表11 入声-k・-p・-tと入声の前の母音】

入声の前の母音	入声-k							入声-p			入声-t					合計1043例 (100%)	
	[e]	[a:]	[o]	[ɛ]	[œ:]	[œ:]	[ɛ:]	[e]	[a:]	[i:]	[e]	[a:]	[i:]	[ø]	[u]		[y:]
語数	8語	4語	11語	8語	20語	2語	1語	18語	14語	8語	18語	8語	15語	3語	3語	8語	149語
○	49	1	75	38	52	6	4	104	20	48	105	2	89	21	13	38	665例 (63.8%)
△	0	2	1	5	26	3	3	12	12	7	10	14	11	0	3	6	115例 (11%)
×	7	25	1	13	62	5	0	10	66	1	11	40	5	0	5	12	263例 (25.2%)

\*○：促音として聞こえる △：曖昧・聞き取れなかった・判断できない ×：促音として聞こえない

## 9. まとめ

日本語も広東語も入声音がk・-p・-tの三種類ある。広東語ではk・-p・-tで閉鎖する音節を「断音」という。断音は、促音のように急激に音が終わる現象である。一文字の「出”chöt”」あるいは二文字の「“壓迫”aat³bik¹」は、この断音の現象が発生するのではないかと考えられる。

そこで、本稿では広東語は日本語と異なり、入声にいずれの子音が後接しても断音の現象が発生するという仮説を立て、日本語母語話者を対象に、広東語における前部の漢字が入声である二字漢語の断音が日本語の音韻として促音のように聞こえるかどうかを調査し、分析することを目的とした。

その結果、促音として聞こえる数が圧倒的に多かったため、広東語では入声-k・-p・-tにいずれの子音が後接しても日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえるという傾向にあることが明らかになった。

ただし、入声の前の母音が[a:]であれば、断音の現象が弱くなり、日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえないという傾向にあるが、入声の前に母音が[a:]以外の場合は断音の現象に影響を与えないということが明らかになった。

なぜ入声の前の母音が[a:]の場合、日本語母語話者には閉音節として促音のように聞こえないのかについては今後の課題として考察していきたい。

## 【注】

- (1) 先行研究を参考にし、「入声音」という表記については、日本語の場合は「入声音」、広東語の場合は「入声」、日広の場合は「入声音」にする。ただし、先行研究の通り、「入声音韻尾」や「入声韻尾」という表記も使用する。
- (2) 「断音」という言い方は『東方広東語辞典』と『現代広東語辞典』に記載されているが、管見の限り、「断音」についての先行研究はない。また、辞典より、「断音」という現象は日

本語の促音に相当し、急に音が止まるということである。信頼性を考慮し、聞き取り調査の対象は日本語教育学を専攻している日本語母語話者の学部生であり、調査の目的・判断基準を理解してもらった上で調査を行った。

- (3) JL：日本語学習者を指す。
- (4) 1981年の常用漢字1945字、2010年の常用漢字2136字である。
- (5) 使用頻度が高い：「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の検索エンジン「少納言」で件数が多いものである。
- (6) 差：3例以下の差を基準とする。
- (7) 有意水準は「 $\alpha$ 」で表され、5% (0.05) あるいは1% (0.01) がよく使用される。

### 【参考文献】

- 浅川哲也 (2011) 『知らなかった！日本語の歴史』東京書籍
- 浅川哲也・竹部歩美 (2014) 『歴史的变化から理解する現代日本語文法』おうふう
- 石澤徹 (2011) 「英語を母語とする日本語学習者における日本語促音の誤聴—アクセントと単語内の位置に着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部文化教育開発関連領域』60 pp.173-181
- 小野浩司 (2011) 「日本語の二重子音について：促音と撥音の相補性に関して」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』16-01 pp.103-109
- 片岡了 (1964) 「恵信尼「仮名写経」の字音—特に舌内入声音について—」『国語学』58 pp.48-59
- 久野百代 (2016) 「香港広東語を母語とする日本語学習者における促音の脱落・挿入・混同について—中国語北方方言母語話者との比較を通して—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』23 pp.37-47
- 孔寶儀 (2006) 「<研究ノート>主題の研究 日本語と広東語の対照」『日本学刊』10 pp.113-122
- 黄力游・林翠芳 (2012) 「広東語と日本語の相似点及び相違点に関する一考察」『Polyglossia : the Asia-Pacific's voice in language and language teaching』23 pp.49-56
- 清水茂 (1964) 「広東語の/e/」『音声科学研究』03
- 館野由香理 (2012a) 「現代日本漢語における唇内入声音の促音化について」『文教大学文学部紀要』25-02 pp.1-21
- 館野由香理 (2012b) 「現代日本漢語におけるハ行子音の半濁音化について」『文教大学文学部紀要』26-01 pp.23-51
- 張麟声・劉永亮他 (2015) 「母語方言に入声を持つ学習者は促音を習得しやすいか—広東語母語話者を例に—」『人文学論集』33 pp.191-201
- 中川勝昭 (2011) 「日本語音韻論の不整合性について」『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要 人間科学篇』24 pp.1-10
- 那須昭夫 (1996) 「二字漢語における促音化現象—最適性理論による分析」『音声学会会報』213 pp.27-39

- 二戸麻砂彦 (2004) 「k入声音漢語の受容と定着」『山梨県立女子短期大学紀要』 37 pp.1-18
- 沼本克明 (1974) 「日本漢字音に於ける唇内入声字の促音化とフ入声」『国語学』 99 pp.1-22
- 沼本克明 (1986) 『日本漢字音の歴史』 東京堂出版 (国語学叢書10)
- 野沢素子 (1980a) 「広東語話者の日本語学習における問題点について—音節・母音を中心に—」『日本語と日本語教育』 08 pp.35-47
- 野沢素子 (1980b) 「広東語話者の日本語学習における音声の問題点について—子音を中心に—」『日本語教育』 41 pp.13-24
- 野澤素子・重松淳 (2000) 「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について(2)—撥音節, 促音節, 二重母音節を中心に—」『日本語と日本語教育』 28 pp.1-16
- 橋本慎吾 (2001) 「音声の問題と規則の問題—初級教科書の語彙頻度分析に基づく特殊モーラの導入時期に関する一考察—」『岐阜大学留学生センター紀要』 2000 pp.17-24
- 長谷川恒雄 (1977) 「広東語の音韻構造と広東語話者の日本語発音」『日本語と日本語教育』 06 pp.13-48
- 肥爪周二 (2003) 「清濁分化と促音・撥音」『国語学』 54-02 pp.108-95
- 馬之涛 (2009) 「広東語の母音の/a/と/e/について」『開編：中国語學研究』 28 pp.91-98
- 馬之濤 (2010) 「廣東語の母音の長短について」『中国文学研究』 36 pp.16-32
- 三宅知宏 (2004) 「「半濁音化」「促音化」と「枝分かれ制約」——形態論と音韻論の接点(3)」『国文鶴見』 38 pp.52-41
- 森田富美子 (1983) 「広東語と日本語における漢字音の比較対照表」『国際学友会日本語学校紀要』 07 pp.1-26
- 山崎誠 (2013) 「近代広東語の音韻変化に関する考察：香港, マカオの欧文資料を中心とした広東語の音韻変化」『Nidaba』 42 pp.40-49
- 頼惟勤 (1958) 「広東語の音韻論について」『中国語学』 70
- 李活雄 (1995) 「広東語と日本語間の漢字音対応研究—漢字読みの頭子音を中心に—」『日本語教育ニュース』 07 pp.161-181
- 李欣 (2014) 「広東語を母語とする日本語学習者の促音の生成と知覚について」『日本語・日本文化研究』 24 pp.69-80
- 林鴻俊 (1984) 「[昭和58年度修士論文レジュメ] 日本語と広東語の音声の比較対照」『東京外国語大学特設日本語学科年報』 07 pp.11-12
- 林史典 (1980) 「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」『国語学』 122 pp.55-69
- ローレンス・ウエイン (1999) 「ハ行音の前の促音—現代語における/Qh/—」『国語学』 199 pp.173-162
- 和田利政・金田弘 (2003) 『国語要説 五訂版』大日本図書

#### 【参考辞書】

- 阿辻哲次・釜谷武志ら (2001) 『角川現代漢字語辞典 五十音引き』 角川書店

北原保雄・久保田淳ら（2006）『日本国語大辞典 第二版』小学館  
小学館辞典編集部（2001）『現代漢語例解辞典 二色刷 第2版』小学館  
千島英一（2005）『東方広東語辞典』東方書店  
藤堂明保（1990）『学研漢和大字典』学習研究社  
中嶋幹起（1994）『現代廣東語辞典』大学書林  
日外アソシエーツ編集部（1994）『漢字異体字典』日外アソシエーツ  
日本難字異体字大字典編集委員会（2012）『日本難字異体字大字典 〈文字編〉』遊子館  
劉扳盛（2015）『廣州話普通話詞典』商務印書館

### 【付記】

本稿は、2018年度に首都大学東京大学院に提出した修士論文の一部を、第44回中国語話者のための日本語教育研究会（成都理工大学、2019年3月16日）において「日本語と広東語の対照研究—入声のある漢字について—」という題目で口頭発表した内容に加筆したものです。学会においてご指導を下さった方々にお礼を申し上げます。修士論文の執筆にあたり、ご指導下さいました指導教官の浅川哲也先生に心より感謝致します。御助言を頂いた奥野由紀子先生、西郡仁朗先生、劉永亮先生、日本語教育学教室の先輩方、また、アンケート調査の協力者に感謝申し上げます。

（ろ・ぶんせい 首都大学東京 大学院 博士後期課程）